

世界遺産の現状と課題に関する一考察

Study of the World Heritage

佐藤悦夫

SATO Etsuo

1、はじめに

「世界遺産」という言葉は、日本においても広く浸透し多くのテレビ番組や出版物が発行され、また旅行商品において世界遺産を巡るツアーが各地で行われている。さらに世界遺産アカデミーが主催する「世界遺産検定」なども出現し、一つの社会現象となっている。

2006年と2007年には、日本の世界遺産暫定リスト作成のために、各自治体に対して世界遺産の推薦候補を募集したり、暫定リストの中から毎年ユネスコ世界遺産センターに世界遺産リストに掲載するために条件の整った遺産を推薦したりしている。また、地方自治体においては、ユネスコに推薦された遺産が世界遺産リストに掲載されるかどうかで、毎年開催される世界遺産委員会の結果に一喜一憂する。

しかし、一方では世界遺産の登録数の問題、観光客の増加による世界遺産への落書き問題、自然災害や戦争等の人為災害による世界遺産の破壊の問題など世界遺産制度そのものや世界遺産そのものが危機にさらされている。

本稿の目的は、①世界遺産の現状と課題を把握すること、②世界遺産の価値の更新の重要性を考えること、③地域づくりの資源としての世界遺産の現状と課題を分析することを通して今後の世界遺産研究の在りかを検討することにある。

2、世界遺産の現状

2-1 世界遺産の概要

世界遺産とは、「世界遺産リスト」に記載されている、「顕著な普遍的価値」(Outstanding Universal Value)を有する人類共通の遺産であり、地球の生成と人類の歴史によって誕生し、過去から現在へ引き継がれ、さらに未来に引き継がれるものである。また、世界遺産は、記念物や建造物群、遺跡、文化的景観からなる「文化遺産」、地形や地質、生態系、景観などからなる「自然遺産」、文化遺産と自然遺産双方の特質を備えた「複合遺産」の3つに大別される(ユネスコ協会連盟 2007)

1972年の第17回ユネスコ総会で採択された世界遺産条約(正式名称、「世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約」)の目的は、文化遺産や自然遺産を人類全体の遺産と考え、台風や地震などの自然災害や戦争や開発などの人為災害による破壊の脅威から保護し、将来にわたって保存するための国際的な協力及び援助の体制を確立することである。世界遺産の登録は1978年

に開始し、文化遺産 8 件、自然遺産 4 件が登録された¹ (ユネスコ協会連盟 2007、2008)。

世界遺産の数は、2011 年 6 月にパリで開催された「第 35 回世界遺産委員会」において、新たに文化遺産 21 件、自然遺産 3 件、複合遺産 1 件が登録され 936 件となった² (ユネスコ 2012)。このように世界遺産の数は、年 20~30 件のペースで増加している。一方、世界遺産に登録されながらも自然災害や武力紛争、大規模な工事、都市開発、密漁等で深刻な被害を受けている世界遺産は「危機にさらされている世界遺産リスト」(以下、危機遺産リスト)に登録され、世界各国の協力を募り遺産を脅かす危機を取り除こうとしている。2011 年現在では、35 件の遺産が危機遺産リストに登録されている (ユネスコ協会連盟 2012)

2-2 世界遺産の問題点

表 1 : 世界遺産の地域別登録数 (2011 年 8 月現在)

	世界遺産条約 の締約国数	世界遺産の 無登録国数	世界遺産委員 会委員国数	自然遺産	文化遺産	複合遺産	世界遺産 の合計	世界遺産 の合計/ 締約国
アフリカ地域	45	15	4	33	45	4	82	1.8
アラブ地域	18	2	5	4	64	2	70	3.9
アジア・太平洋地域	41	10	4	53	143	9	205	5.0
ヨーロッパ・北米地域	51	1	5	58	384	10	452	8.9
ラテンアメリカ・カリブ地域	32	6	3	35	89	3	127	4.0
合計	187	34	21	183	725	28	936	5.0

註 1 : 地域分類は、ユネスコの世界遺産センターの分類に準拠

(出典：古田陽久・古田真美 2011 のデータをもとに筆者が作成)

まず第 1 に、世界遺産として登録される数に上限が設けられる可能性があるかどうかの問題点が挙げられる。前ユネスコ事務局長の松浦氏は、「世界遺産を一つも持たない条約締約国がアフリカや太平洋地域に多く存在するので上限をいくつにするかという議論をするには早すぎる。しかしながら世界遺産数が 1000 件を超えると真剣に議論しなければならない」旨の発言をしている (松浦 2011)。これらの問題に対応するために世界遺産委員会では現在、1 回の委員会での審議数には上限を設けている。

第 2 の問題点として、国ごと (地域ごと) の世界遺産の数に偏りがあることならびに文化遺産の数が他の遺産とくらべて多いことなど世界遺産に偏りがあることが挙げられる。表 1 は、2011 年時点での地域別登録数を示しているが、1 カ国の平均が 5.0 件であるのに対して、ヨーロッパ・

¹ 文化遺産 8 件：アーヘン大聖堂 (ドイツ)、キトー市街 (エクアドル)、クラクフ歴史地区 (ポーランド)、ゴレ島 (セネガル)、ランス・オ・メドー国定史跡 (カナダ)、メサ・ヴェルデ国立公園 (アメリカ合衆国)、ラリベラの岩窟教会群 (エチオピア)、ヴィエリチカ岩塩坑 (ポーランド)

自然遺産 4 件：ガラパゴス諸島 (エクアドル)、ナハニ国立公園 (カナダ)、シミエン国立公園 (エチオピア)、イエローストーン国立公園 (アメリカ合衆国)

² 第 36 回世界遺産委員会 (2012 年) 終了時点では、文化遺産 745 件、自然遺産 188 件、複合遺産 29 件の合計 962 件となった。

北米地域では、8.9件と多くまたアフリカ地域では1.8件と大きく平均を下回っている。また、文化遺産の登録数の方が圧倒的に多く、その約半数がヨーロッパ・北米地域に存在する。

2012年時点で、国ごとの世界遺産の数を見ても、最も多く世界遺産を所有している国は、イタリアで47件、次にスペイン44件、中国43件、フランス38件と続く。また、無登録国数は、2011年より2か国減少し32か国となった。

第3の問題点として、世界遺産に登録されたことによる観光客の増加および観光客のもたらす脅威があげられる。世界遺産効果による観光客の増加は多くの地域で見られる。例えば「白川郷・五箇山の合掌造り集落」は、1995年の12月に登録された。白川郷では、1995年に771千人であった観光客が1996年には1,019千人に増加しその後増加傾向にあり、2008年には東海北陸道の全線開通の影響などもあり1,861千人に達した（白川村 web site）。このように増加する観光客により、観光地におけるゴミ捨て問題、車の渋滞、地域住民のプライバシーの侵害、落書きなどの問題が起きている。松浦氏は世界遺産に対する脅威のうちの一つとして「観光事業の増加」をあげている（松浦 2008：241-244）。その中で観光客による世界遺産の破壊につながる行為を取りあげ、チリのイースター島のモアイ像に対する日本人による落書きに言及している。このような観光による脅威から遺産を守るために入場制限を実施あるいは検討している世界遺産もある³。

世界遺産委員会は、観光が世界遺産に与える影響について、すでに2001年には認識しており、同年には「世界遺産を守る持続可能な観光計画」を策定することを承認した。このプログラムの目的は、世界遺産の価値を保護し、観光による脅威を減らすために、世界遺産委員会や遺産保有国の管理担当者をサポートすることにある。持続可能な観光計画とは、「世界遺産の価値を損なうことなく、観光と保護を両立させるための関係者を広く結び付け、実際の観光業に役立つ手法を開発する」ことである。そのため、持続可能な観光計画のための7つのガイドラインが提唱されている。すなわち、①観光に対処できるだけの管理能力をつける、②遺産地域の人々が観光業界に参加してメリットを享受する、③世界遺産周辺地域の商品を市場に出す手助けをする、④保護教育を通じて世界遺産に対する誇りを喚起する、⑤観光収益をこれまで不十分だった遺産の保存・保護費用に充てる、⑥他の世界遺産や保護地域での経験を共有する、⑦世界遺産保護について観光業界関係者の意識を高める、の7つである（日本ユネスコ協会連盟 2008：40-43）。

3、世界遺産に注がれるまなざし

3-1 学術研究の対象としての世界遺産

世界遺産、特に文化遺産に関しては考古学、歴史学、民族学(民俗学)、等の分野からまた自然遺産に対しては自然科学の様々な分野から学術調査が行われている。一方、国や地方自治体においては、世界遺産の誘致活動、旅行会社等の観光産業では世界遺産を組み込んだツアー企画等、様々な立場から世界遺産は注目されている。

この節では、学問研究の対象としての世界遺産の価値の更新の重要性を筆者が調査に参加して

³ エジプトのクフ王のピラミッドでは、1日300人の入場制限を実施。また、ペルーの「マチュ・ピチュの歴史保護区」でも、入場者制限や入場禁止期間を検討中（日本ユネスコ協会連盟 2008：43）。

いるメキシコのテオティワカン遺跡を事例に分析する。テオティワカン遺跡は、1987年にメキシコの最初の世界遺産として登録された⁴。

標高約 2300m のメキシコ盆地に位置するテオティワカン遺跡は、前1世紀から後7世紀頃まで栄えたアメリカ大陸最大級の都市国家であった。テオティワカンでは、入念な都市計画に基づいた建築活動が、紀元1年から150年にかけて行われたといわれている。その都市設計の軸となったのが、一辺約150m、高さ45mの「月のピラミッド」を基点として、都市の中央部を南に走る長さ4km、幅45mの「死者の通り」と呼ばれる大通りであった。この通りに沿って、20以上の神殿が建設され、この中でも「太陽のピラミッド」は、一辺約220m、高さ65mの規模を持つ巨大な神殿であった。周辺には、20平方キロメートルにわたり2000を超えるアパート形式の集合住居が存在し、当時の人口は10万から20万人といわれている。アパート建築に居住した集団の中には、黒曜石製石器、土器、織物などの工芸品を専門に生産する集団もいた。このようにテオティワカンは、メキシコ中央高原をコントロールするような都市国家であり、その影響はティカル遺跡やコパン遺跡などのマヤ文明の諸都市国家にも大きな影響を与えている(図1)。

この遺跡を最初に科学的考古学調査を行ったのは、マヌエル・ガミオである。ガミオは、1900年代の初頭に「シウダデラ」、「太陽のピラミッド」、「月のピラミッド」など建造物を中心に発掘し、修復作業を行った。太陽のピラミッドを修復した時に、もともと4層だったピラミッドを、あやまって5層に復元してしまった。当時メキシコは、メキシコ革命直後の時期で新たな国民文化創成の事業を推進していた。ガミオもその事業に携わった一人で、古代文明から現代にいたる文化史的全体の中に革命後のメキシコ国家を位置づけようとしていた(落合1988)。

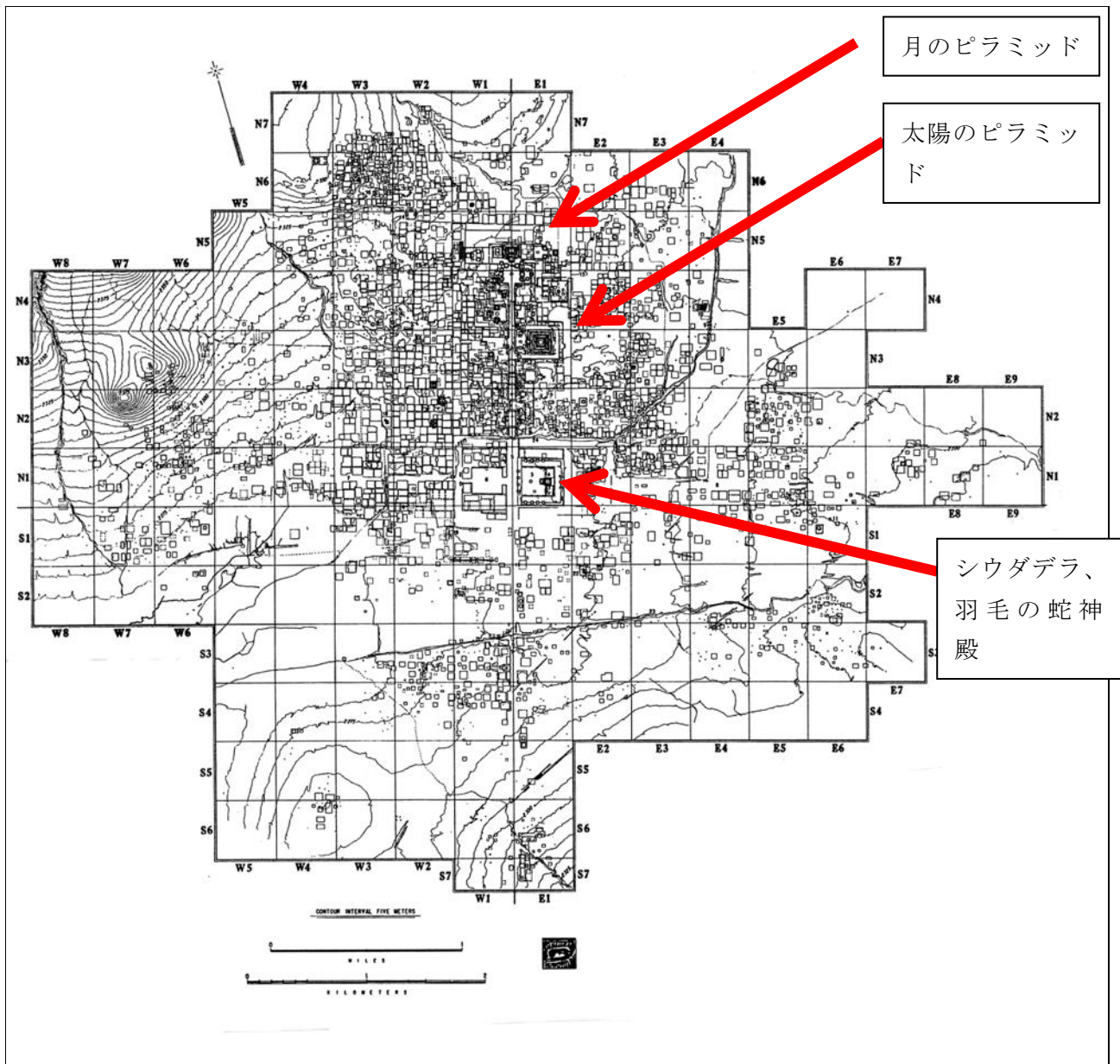
1962年からレネ・ミリオンをプロジェクトリーダーとするロンチェスター大学のテオティワカン・マッピング・プロジェクト (Teotihuacan Mapping Project)が開始した(Millon 1973, 1974)。500m×500mのグリッドを地上にくみ、東西8.5Km(最大)、南北6.5Km(最大)の地域で発見された建造物を測量した。また、20平方キロメートルの範囲で約5000の遺跡を見つけ、土器や黒曜石等の表採も行った。さらに、測量や表採で得られたデータを確かなものにするために、テスト・ピットの発掘(試掘)も行われた。こうして、膨大なデータが収集され、土器や黒曜石の製作場所なども明らかになった。メソアメリカにおける1960年代以前の遺跡の調査は、都市の中心部のピラミッド建造物をおもに調査するのが主流であり、遺跡全体の様相を調査することは無かった。このような測量に基づく遺跡全体の調査は、ティカル遺跡で開始され、その後テオティワカン遺跡やコパン遺跡でも採用され、現在では多くの遺跡で遺跡の中心部分だけでなく周辺部分の様相も把握されている。

国立人類学・歴史学研究所(INAH)のルベン・カブレラを団長とする調査が1980年～1982年に行われた(Proyecto Arqueológico Teotihuacán 1980-82: PAT80-82)。この調査では、シウダデラ地区を含む都市の南側を主に調査し、建造物の構造や都市の水路などが解明された。またシウダデラ地区からは、墓も発見されている(Cabrera et al. 1982, 1991)。「羽毛の蛇の神殿」の南北の軸上で発見された様々な墓の調査の結果、東西の軸上にも同様の墓があることが予想された。

⁴ 1987年に登録された遺産は、「古代都市パレンケと国立公園」(文化遺産)、「メキシコシティ歴史地区とソチミルコ」(文化遺産)、「古代都市テオティワカン」(文化遺産)、「オアハカ歴史地区とモンテ・アルバンの考古遺跡」(文化遺産)、「プエブラ歴史地区」(文化遺産)、「シアン・カアン」(自然遺産)の合計6件である。

1987年 Millon, Cowgill, Sugiyama, Cabrera 等を中心に新しいプロジェクトが作られた (Proyecto Templo de Quetzalcoatl 1988-89:PTQ88-89)。この調査では、①神殿の東側の発掘調査、②神殿の北側、西側の発掘調査、③神殿の内部の発掘調査、が行われた。この調査により、「羽毛のある神殿」の建築に伴う多くの人身犠牲者の墓が発見された (Sugiyama 1992,1993)。神殿の回りや中の墓に埋葬された人骨の総数は、200人ほどと推測されている。

図1：テオティワカン遺跡の全体地図



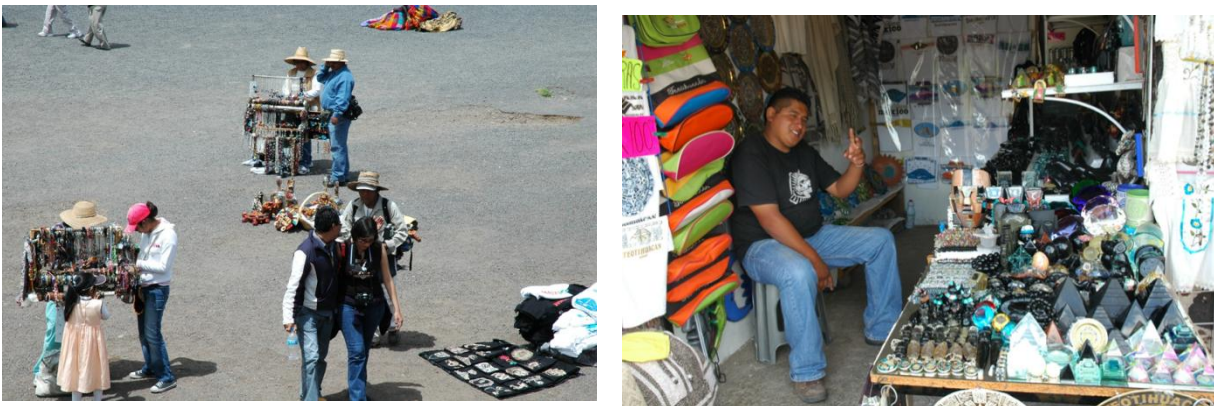
(出典：Millon 1973、一部改変)

「月のピラミッド」の発掘は、1998年に愛知県立大学の杉山とメキシコの国立人類学歴史学研究所のルベン・カブレラ氏を共同発掘団長として、アメリカ政府の科学研究基金等の助成を受けて開始した。2000年以降は、日本政府の科学研究費の助成を受けてた。「月のピラミッド」プロ

ジェクトの目的は、古代都市の起源と複合社会の形成メカニズムを歴史的に復元することであり、その意味でも都市の中心地にある「月のピラミッド」は、テオティワカンの都市の起源を解明する上では最も適した建造物と言える（杉山 1999、2000）。

以上のように、テオティワカン遺跡は過去約 1 世紀にわたる調査の歴史があり、1987 年の世界遺産登録後も多くの調査により新しい成果が得られ、2012 年時点においてもメキシコのチームを中心に「シウダダラ」の調査が行われている。池田は、文化遺産、特に遺跡の価値について「文化遺産の恒久的な価値とは、過去についての解釈が次々と供給されているから意味を持ち続けているのである。そのために文化遺産は、現在の権威ある正当な解釈、つまり科学的な考古学研究を常に必要とする。そして学問の権威とは宙に浮かんでいる存在ではなく、ときにはその内容がチェックされ人々の関心を通して社会の眼にさらされる」と述べる（池田 1996：199）。世界遺産の価値は、このように世界遺産登録後も学術的調査が継続され常に新しい価値が更新され続けることが必要である。また、遺跡は、考古学研究の対象としてのみ存在するのではなく、その成果は、遺跡の調査報告書、遺跡の修復、博物館における展示、マスメディアによる報道等を通して社会に還元され、観光資源の魅力形成につながっている。

図 2：遺跡内での土産物の売り子（左写真）と遺跡周辺の土産物店（右写真）



（写真、筆者撮影）

一方、観光を通じた地域振興の視点から見ると、テオティワカン遺跡はどのような課題を持つのだろうか。テオティワカン遺跡は年間 500 万人ほどの観光客が訪れる観光地であると言われている。しかしながら、遺跡は国が管理していること、住民の住んでいる町と遺跡は離れていること、観光客は首都のメキシコシティに滞在しテオティワカンは日帰りの観光地であることなどから地域住民は、遺跡周辺にある観光客用のレストランやホテルを除いて必ずしも経済的恩恵を受けているとは言えない（図 2）。今後は、お土産物の質の向上のための技術指導や組織的販売、地域住民との交流の場の形成、学校教育や住民教育等を通して地域住民が世界遺産のある地に住むことに「誇り」をもてるような政策が必要であろう。

3-2 地域づくりの資源としての世界遺産

この節では、地域づくりの資源として世界遺産を持つ地方自治体やそこに住む住民の現状と課

題について平泉および五箇山を事例に分析する。

(1) 平泉の現状

2011年6月のパリで開催された第35回世界遺産委員会で、日本から推薦のあった「平泉」と「小笠原」がそれぞれ文化遺産と自然遺産に登録された。平泉の登録過程は下記のとおりである。

2001年：日本の暫定リストに記載

2006年：「平泉—浄土思想を基調とする文化的景観」としてユネスコに推薦書を提出

2007年：イコモスの調査

2008年：第32回世界遺産委員会（カナダ）での審議、記載延期

2009年：「平泉—仏国土（浄土）を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群」として再度推薦書を提出

2010年：イコモスの調査

2011年：第35回世界遺産委員会（パリ）での審議、世界遺産リストに記載

2009年の再申請は、平泉の仏堂と庭園群が6～11世紀の期間に中国・朝鮮半島と日本列島との建築、庭園の意匠・設計に関する「価値観の重要な交流」を示しているという意義を強調するために、2006年の申請時には平泉の構成資産であった「骨寺村荘園遺跡（一関市）」、「達谷窟（平泉町）」、「長者が原廃寺遺跡（一関市）」、「白鳥館遺跡（一関市）」の物件が外され、「中尊寺」、「金鶏山」、「毛越寺」、「柳之御所遺跡」、「無量光院跡」、「観自在王院跡」の6物件に絞って申請された。

また、2008年には「平泉の自然と歴史を生かしたまちづくり景観条例」が改正され、その第一条の目的には、「平泉の自然と歴史が調和した文化的景観の保全と創造に関し、町民がその意義を理解し、史都にふさわしい、親しみと誇りの持てるまちづくりの実現を図るとともに、文化的景観を将来の世代に保存し、継承することを目的とする」と記されている（平泉町 web site、一部省略）。このように平泉町は世界遺産を中心に平泉の自然と歴史を生かしたまちづくりを進めようとしている。

(2) 平泉の課題

平泉は人口 8,575 人、世帯数 2,609 戸、面積 63.4 km²の小さな自治体であるが（2010年4月現在）、2011年の観光客入込数は 1,868 千人、2012年は 2,640 千人と大幅に増加している。しかしながら、平泉町には宿泊施設も少なく、通過型観光地となっている。また、観光客の訪れる場所は、世界遺産の中尊寺や毛越寺であり、必ずしも町全体に観光客が分散しているとは言えない。今後は、大型バスを利用して団体に訪れる観光客の誘致のみならず、自然と歴史が調和した「史都」平泉に興味を持つ歴史好きの女性や俳句好きの人々など SIT(Special Interest Tourism)型観光地としての魅力を発信する必要がある。

(3) 骨寺村荘園遺跡（一関市巖美町本寺）について

中尊寺の荘園であった本寺地区は、今日個数百個ほどの農村地帯である。吉田氏らの研究によると（吉田 2008）、中尊寺には骨寺村を描いた鎌倉時代の2枚の絵図（国指定重要文化財、中尊寺所蔵）が残されている。このような荘園絵図は、今日全国に40点ほど残されており、それぞれ中世における農村研究を進めるための重要な資料とされている。中尊寺の絵図に描かれた様々な寺社や遺跡は、2005年に国史跡「骨寺村荘園遺跡」の指定を受け、さらに本寺地区全域の

景観は、2006年に重要文化的景観に指定された。そして、2006年の平泉の世界遺産の登録にあたっては、重要なコアゾーンの一つとしてユネスコに推薦された。

2009年の再申請にあたって除外された「骨寺村荘園遺跡」を持つ本寺地区は、その後どうなったか。佐滝の取材によると（佐滝 2009）、2009年7月には（再申請の構成資産から外されることを聞かされて2か月後）地域の案内所、ガイド待機所、レストランを兼ねた骨寺村荘園休憩所も完成し観光客の受け入れ態勢も整っていた。このような状況において、今回の対応に対しては国や県に対する不信感をにじませる人々も多かったようである。

2011年8月、2012年8月に筆者は、骨寺村荘園遺跡を訪問した。観光客で賑わう中尊寺や毛越寺とは逆に、骨寺村荘園遺跡にはほとんど観光客はいなかった。今後、世界遺産平泉の構成資産として追加登録をめざすのも一つの戦略であるが、むしろ世界遺産とは独立した形で、「中世の農村の姿を残す地域」として独自に活動した方がその価値をアピールできるように思える。

（４）五箇山の現状と課題

富山県と岐阜県の県境にある五箇山地域は、1995年に「白川郷・五箇山の合掌造り集落」として世界遺産に登録された。1995年から2011年までの五箇山地域の入込み数の動向を見てみると、当地域には毎年70万～80万人前後の観光客が訪れている。1996年は、当地域が世界遺産に登録された影響もあり前年比46.7%増の901,000人の観光客が訪れた。

2008年からの五箇山地域での観光客動向調査や2011年に実施したヒアリング調査によると、五箇山地域の抱える課題は次のように整理できる（佐藤 2012a）。

①観光客が世界遺産に登録されている菅沼集落や相倉集落に集中し、他の観光資源へのアクセスが少ない。

五箇山地域には2つの合掌集落以外にも、岩瀬家や村上家を代表とするような合掌造りの家屋、道の駅上平や道の駅平などの観光資源があるが訪問客も少なく、また観光客の滞在時間も短い。それぞれの合掌造り家屋の特徴を解説したパンフレットなどはあるが、五箇山全体の文化に関する情報が少ない。従って、五箇山全体の文化を把握するために、五箇山の歴史や越中桂のように消滅した合掌集落などに関する情報をまとめた冊子や展示が必要である。

②子高齢化に伴う人口減少

少子高齢化が進み、合掌集落の維持が困難になりつつある。合掌集落だけでなく、五箇山地域全体の観光まちづくりを行い、雇用を創出し、地元の若者が五箇山で生活できる環境が必要である。

五箇山では、このような課題を解決するために外部との連携に取り組んでいる。例えば、2012年9月には五箇山菅沼種楽保存顕彰会とNEXCO中日本がカヤ場保存のための協力協定を結んだ。これにより2014年までの3年間、合掌家屋の屋根を葺くのに欠かせないカヤを刈ったり植えたりする保全活動を協働で行う予定である（佐藤 2012b）。今後は、大学や行政と連携しながら新しいコミュニティビジネスの創出や五箇山の歴史的価値の再評価などの事業も考えられる。

4、まとめと今後の課題

世界遺産は、1978年の12件の最初の登録から始まり、2012年現在962件に達した。また、

世界遺産は、国家、地方自治体、地域住民、観光産業、マスメディア、研究者のような自分たちの目的で利用しようとする人々の目にさらされている。そこには、プラスの面とマイナスの面の両方が存在している。例えば、中村が指摘するように、世界遺産の登録により観光産業を中心とする先進国の資本の流入、その結果、地域社会が変質し従来の保護システムが失われ、世界遺産の破壊につながる。遺産を支えてきたコミュニティをいかにして守るのが最重要課題であり、またこの課題は、世界遺産は誰のためのものか、という議論につながる大きな問題でもある（中村 2006 : 166）。

世界遺産に関する課題は、登録数、登録の偏りなど世界遺産の制度レベルで考える必要のある課題から個別の地域的課題まで様々である。また、毎年遺産登録の発表に一喜一憂している間に多くの歴史的遺産が消滅しつつあるのも事実である。この事実は、世界遺産に登録されるものとされないものでは遺産の価値に優劣があるのか、という議論にもつながる。

さらに青柳らは、有形文化遺産も無形文化遺産も現在に生きる社会集団のアイデンティティに深くかかわりあっていること、従って有形文化遺産の価値は歴史的なものであると同時に、常に現代的・流動的なものであることを指摘している（青柳、松田 2005 : 23）。この指摘や世界遺産と地域振興の課題は、世界遺産は今日の我々にどのような意味を持つのか、という議論と結びつく。

世界遺産の登録数が飽和状態になり世界遺産の希少性が失われつつある今日、世界遺産の理念、定義、登録制度の在り方をもう一度再考する時期に来ている。世界遺産を研究する大学院や学部のカリキュラムなどが出現しているが、遺産の危機管理やメンテナンス、観光政策等の知識を身に付けた専門職の養成だけでなく、今後は、総合的な学問として世界遺産の課題や在り方を考える「世界遺産学」が望まれる。

参考文献

青柳正規、松田陽

2005 「世界遺産の理念と制度」佐藤信 編『世界遺産と歴史学』 pp.5-25 山川出版

池田光穂

1996 「遺跡観光の光と影：マヤ遺跡を中心に」石森修三編『観光の20世紀』 pp.193-206

ドメス出版

落合一泰

1988 「ラテンアメリカのモニュメント、モニュメントとしてのラテンアメリカ」

『現代思想：ラテンアメリカ増殖するモニュメント』 Vol.16

佐藤悦夫

2012a 「世界遺産・五箇山の観光の現状と課題」、中島恭一・田広林監修、東アジア交流プロジェクト編『東アジアの交流と地域の発展』、pp.237-257、桂書房

2012b 「世界遺産・五箇山地域の観光資源の保全と活用に関する考察」『第23回全国学術研究大会 発表要旨』 pp.17-20

佐滝剛弘

2009 『世界遺産の真実』 祥伝社

白川村 Web Site (観光統計) : <http://shirakawa-go.org/mura/toukei/2580/>

杉山三郎

1999 「メキシコ テオティワカンの月のピラミッドの発掘」『考古学研究』 第46巻 第3号

2000 「テオティワカン月のピラミッドにおけるイデオロギーと国家」『古代アメリカ』 第3号

中村俊介

2006 『世界遺産が消えてゆく』 千倉書房

古田陽久、古田真美

2012 『世界遺産データブック - 2012年版 - 』シンクタンクせとうち総合研究機構

平泉 Web Site :

http://www.town.hiraizumi.iwate.jp/site/entry/cat259/cat263/cat273/cat525/_19.php

松浦 晃一郎

2008 『世界遺産～ユネスコ事務局長は訴える』 講談社

2011 「講演 人類の文化遺産をいかに守るか」安江則子編『世界遺産学への招待』 pp.2-26
法律文化社

吉田敏弘

2008 『絵図と景観が語る骨寺村の歴史～中世の風景が残る村とその魅力』 本の森
ユネスコ協会連盟

2007 『世界遺産年報 2007』 日経ナショナルジオグラフィック

2008 『世界遺産年報 2008』 日経ナショナルジオグラフィック

2012 『世界遺産年報 2012』 東京書籍

Cabrera, C., R.I.Rodriguez G., and N.Morelos G.(coordinators)

1982 *Teotihuacán 80-82: Primeros resultados* Instituto Nacional de Antropología e Historia

1991 *Teotihuacán 1980-1982: Nuevas interpretaciones* Instituto Nacional de Antropología
e Historia

Millon, Rene

1973 *The Teotihuacan Map* University of Texas Press

1974 "The Study of Urbanism at Teotihuacan, Mexico"

Mesoamerican Archaeology: New Approaches edited by Norman Hammond University of
Texas Press

Sugiyama, Saburo

1992 "Rulership, Warfare, and Human Sacrifice at the Ciudadela: An Iconographic Study of
Feathered Serpent Representation" *Art, Ideology, and the City of Teotihuacan*
Dumbarton Oaks Research Library and Collection

1993 "Worldview Materialized in Teotihuacan, Mexico" *Latin American Antiquity* Vol.4,
No.2, pp.103-129